

規範意識を育む指導について

福島 睦恵

1 はじめに

手元に平成23年3月16日付けの朝日新聞の記事「ザ・コラム」(山中季広ニューヨーク支局長)がある。東日本大震災・津波の直撃を受けた東北の住民について各国メディアがどう伝えたかが書かれている。(一部抜粋)

『インド紙ビジネスラインは「日本人はだれもパニックに陥らなかった。動揺する外国人を机の下にもぐらせ、避難場所へ手際よく誘導してくれた」

中国の環球時報は「数百人が広場に避難したが、毛布やビスケットが与えられ、男性は女性を助けていた。3時間後に人がいなくなった時、ゴミ一つ落ちていなかった」

各国取材陣が驚きの視線で報じているのが、甚大な被害を受けながら日本の人々が少しも節度を失わないことだ。すすんで食べ物を分け合う被災者の姿に感じ入り、怒号もけんかも起さない避難所の静けさに心動かされているのだ。

ニューヨークタイムズ紙の元支局長は「震災しても日本社会は整然としていて秩序に乱れがない。阪神大震災で会った被災者も実に立派だった。繁華街で店という店のガラスが割れ、商品が手の届く先に見えているのに、誰も盗もうとはしない。救援物資を待つ列が長くても奪い合いすら起きない。感心しました」

もうひとつ海外メディアが注目している現象がある。日本では被災地であからさまな便乗値上げが横行しないことだ。水や米が地震前と同

じ価格で売られ、しかも人々はがまん強く、店の前に何時間でも列をなして待っている。

マイケル・サンデル米ハーバード大学教授は「日本以外ではまず考えられないことです。日本では、いくら街が廃墟になっても、人々は自制心をゆるめず、わが街のために結束している。被災後の市民のふるまいには胸を打たれました」

海外の人々は、日本の被災者たちの沈着で節度ある態度に讃嘆を惜しまない。』

また、2014年サッカーW杯ブラジル大会で日本代表チームは1勝もできずに第一次リーグで敗退したが、日本のサポーターがゲーム終了後、スタンドのゴミを拾う等の行為が各国メディアに賞賛されていたことも記憶に新しい。

2 規範意識の低下・希薄化

翻って、日常生活の中で「人ごみの中で携帯やスマホを見ながら歩く」「自転車で歩道を疾走する」「咳やくしゃみをする時に口を押えない」「ペットの糞を始末しない」「ゴミのポイ捨て」「電車やバスの中で化粧をする」「電車の中で床に座り込む」「道路を横に並んで歩く」「挨拶をしない・返さない」「図書館の本を切り取る」「図書館などで周りを気にせず大きな声で話をしている」等々挙げればきりがなく、他人への影響を考えない行為、ジコチュウな行為が横行している。

「児童生徒の規範意識を育むための教師用指

導資料」(文部科学省・警察庁 平成18年)には、規範を「人間が行動したり判断したりする時に従うべき価値判断の基準」とあり、「そのような規範を守り、それに基づいて判断したり行動したりしようとする意識」を規範意識と説明している。

Norm (規範) の語源がラテン語の『大工の物差し』であることは非常に意味深いと言える。建築に使用する物差しが人々の間できちんと認識され共有されていればこそ、私たちが安全で安心して利用できる建造物が創られるわけである。

前述のような行為は規範意識が低下・希薄化していることの表れであり、教育課題となっており、久しい。

この様な事例の背景として、地域共同体の崩壊による地域の教育力の低下、親の教育力の低下、地域や社会の一員であるという意識の乏しさ、自分さえよければという考え、物質的価値や快楽を優先する意識、様々なふれあい体験の不足、自己有能感・自己有用感の低下などが考えられる。社会全体のこのような風潮が子どもたちの生活に多大な影響を及ぼしている。まさに「子どもの世界は社会の鏡」なのである。

3 規範意識を育むために

規範意識について、学校教育法(平成19年改正)第21条では、義務教育の目標として「学校内外における社会的活動を促進し、自主、自律、及び協同の精神、規範意識、公正な判断力並びに公共の精神に基づき主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」と規定され、中央教育審議会答申(平成20年)は「子どもたちに、基本的な生活習慣を確立させるとともに、社会生活を送る上で人間としてもつべき最低限の規範意識を、発達の段階に応じた指導や体験を通して、確実に身に付けさせることが重要である。」と指摘している。

また、「中学校学習指導要領解説 道徳編」では、「とりわけ、基本的な生活習慣や人間としてしてはならないことなど社会生活を送る上で人間としてもつべき最低限の規範意識、自他の生命の尊重、自分への信頼感や自信などの自尊感情や他者への思いやりなどの道徳性を養うとともに、それらを基盤として、法やルールの意義やそれらを遵守することなどの意味を理解し、主体的に判断し、適切に行動できる人間を育てることなどが重要な課題となっている」と記されている。

これらのことを踏まえ、子どもたちの規範意識を育むために以下の二点について考えを述べてみたい。

(1) 「道」を教える

『すでに指摘されたことであるが、「道徳」という言葉自体が「道」という言葉を含んで成り立っていることは、意味深いことであると思われる。「道」は生きとし生けるものの必要にふさわしく自然にできるものである。地上の道は最初はけものの道であり、やがて同時に人間のすべての人々にとっての安全な道として利用されることにもなる。とくに安全を求めて「廻り道」が求められることもあれば、時には多少の危険を覚悟してもあえて「近道」が求められることもある。しかしいずれにせよ、それらは、人間が「善く」生きるという目的に応じて開発されたものにはちがいないのである。しかもこうした道は、単にひとりの人間にとってふさわしいという理由で道となるわけではない。同じ目的をもつ何人もの人々にとって相互的にふさわしいという理由で道となるのであり、したがってまた、後から同じ目的をもって来る人々にとっても、やはりそこを行かざるをえない道ともなるのである。この地上の道と同じ性質のものが、人間の生き方についてもあると考えなければならない。』(村井実著「道徳は教えられるか・道徳教育の論理」小学館 昭和62年)

規範(意識)が長い歴史の中で生まれ、幾多

の紆余曲折があったにせよ、人々が「善く」生きるためにふさわしいものであるということで承認されて人間社会に継承されてきたものと考えれば、規範（意識）は人々にとっての「道」そのものであると言える。

洋の東西を問わず、いつの時代でも、家族は生まれてきた子どもが社会の中で将来にわたり幸福に暮らせるようにと願い、衣食住における基本的な生活習慣が身につくように、また周囲の人々と円滑に関われるように家庭の中で様々な躰を行ってきた。「脱いだ衣服はたたんでおくこと」「食事の前には手を洗うこと」「食べる時にはいただきます、食べ終わったらごちそうさまを言うこと」「使ったものは片づけておくこと」「順番を守ること」「約束を守ること」「人の体や心を傷つけないこと」「傷つけてしまった時にはごめんなさいと謝ること」「人のものを盗んではいけないこと」「うそをついてはいけないこと」等々、これらのことが一通り身に付くように家庭教育として教えられてきたはずです。

家庭における教育力の低下が言われる中、改正教育基本法第10条に「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする。」と規定され、家庭教育がすべての教育の出発点であることを改めて明確にした意味は大変大きいといえる。

さらに、生活範囲や交友関係の広がりとともに、就学前までには家庭以外の場所である保育所や幼稚園でも、子どもたちは様々な場面でルールや約束事についての学びを広げ深めてきたはずです。

そして、就学してからも同様のことが子どもたちの発達段階に応じて、道徳や特別活動はじめ学校教育全体を通して繰り返し、繰り返し指導されてきている。

しかし、前述のとおり子どもたちの規範意識

は必ずしも十分に育っているとは言えない状況である。社会の激しい変化に伴い、人々の価値観が多様化する現在、お互いに気持ちよく生活するために必要な心構えや生活態度（行為）という「道」を子どもたちは本当に教えられてきたのか甚だ疑問に思うものである。

例えば、子どもたちは物心がつくころから「人に迷惑をかけてはいけない」と教えられて育ってきた。このことを言葉としては知っているわけである。しかし、知っている程度や理解の程度を吟味しなければなりません。

まず、自分の行為そのものが迷惑行為であると認識していない場合である。これでは、行為の是非についての葛藤は起こらないし行為の結果に思いが至らないのは当然である。このような子どもには、規範そのものをきちんと教え、理解させなくてはならない。

次に、自分の行為はしてはいけないことだと認識できても、そのことにより相手にどのような辛さや悲しみ、苦しさを与えているのかを理解できない場合や、自分の行為が相手に不快を与えたと認識しても、その不快さを切実に感じるができないために、行ってはいけないものだ判断できない場合である。

このような理解の状況を吟味したうえで、もう一度原点に立ち返って、価値観の押しつけにならないように、子どもたちに規範についての理解と自分の行為の是非やその結果として相手がどのような想いを抱くのかということに対する理解を広げ深めていかなければならない。

そのために、子どもたち同士の生活の中で起こる様々なトラブルの解決に向けて、迷惑行為を行った者と迷惑を受けた子どもとが建て前ではなく本音でのやり取りが行えるように指導することが求められる。この繰り返しにより、自分の行為が相手に与える影響を通り一遍の言葉だけでの理解ではなく、また教師からの指導を鵜呑みにするだけでなく、子どもたち自らが自分の行為が周囲の人々に与える影響を想像し、自身の行為の是非を考えられるようにする指導

が欠かせない。そこから、自他ともにかけがえない存在であり、互いを尊重し相手の気持ちを深く考え、皆で気持ちよく生活していこうとする心情が育つ。

同様の意味で、「車椅子体験学習」「盲導犬体験学習」「手話体験学習」「高齢者疑似体験学習」「被災地体験学習」等は子どもたちにとって大変貴重な学習となる。障がい者や高齢者とのふれあいの中で、当事者から日常生活での周囲の人々の言動から受ける、辛い想いや悲しい想い、悔しい想い、逆に嬉しさや喜びの声を直接伺い、社会的弱者と言われる人々の切実な想いを肌で感じ実感として受け止められるような指導を、規範意識を育むために大いに取り入れるべきである。

(2) 学級経営の充実（学級集団づくり）

学級担任である教師が、日常的にその担任する子どもたちに対して、全体的にあるいは個別的にすすめているもろもろの指導や教育的配慮、あるいはそれに伴う計画や措置、処理などすべての営みが学級経営である。

子どもは常に学級の集団の中に存在し、集団とともに意識も行動も変容していくものである。望ましい一人ひとりの子どもの成長を図るためには、学級担任にとって学級という集団の経営が欠かせないことになる。

そこで、学級集団について考えてみたい。人々が集まっている状態や状況をよく見ると、いくつかの違いがあることに気付く。

まず、たくさんの人が集まっている駅のホーム。ここに集まっている人々は電車に乗るという同じ行動をするわけですが、ほとんどの人は互いに顔も名前も知らず、挨拶もしません。黙々とそれぞれ異なる目的の駅まで電車に乗るために集まっている人たちです。共通の目標はありませんし、心の交流もつながりもありません。このような人々の集まりは「群れ」とか「群衆」と言える。

次に、ツアー旅行とかパック旅行というもの

を考えてみたい。旅行会社が企画をして国内外の名所旧跡などの観光スポットを巡る旅行です。ここに集まった人々は決められた観光地に行くという意味を持って集まったわけですから同じ目的を持っている。旅の途中では、挨拶をしたり名前を教え合ったり会話もするでしょうから多少の心のつながりも生まれる。しかし、集まった人々は皆お客様ですから役割分担はありません。このような人々の集まりは「団体」と言える。

それでは、演劇をする人たちの集まり、劇団はどうか。演目が決まると配役が決まる。若い人もいればベテランもいる。演技が上手な人もいればそうでない人もいる。また、スタッフとして照明や音響や衣装担当、大道具小道具担当もいます。劇団員はいい芝居に仕上げようという共通の目標を持っている。一人ひとりにきちんとした役割分担があり、誰が欠けてもいい作品は作れない。構成員相互に心の交流があり所属意識、連帯意識もある。さらに構成員として守るべき規律（集団としてのモラル）がある。このような人々の集まりこそ「集団」と言える。

「集団」の条件として、一つには「共通の目標があること」、二つには「構成員それぞれに役割分担があること」、三つには「相互に心の交流や所属意識、連帯意識があること」四つには「集団としての規範意識があること」があげられる。小・中学校の学習指導要領の特別活動の目標に「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達……」とありますが、ここで言う「集団」の意味はこのことを指していると考えられる。

次に、集団の質について考えてみたい。学級集団づくりを進めていく時に忘れてはならない働きが「目標達成機能」と「集団維持機能」の二つである。「目標達成機能」とは、学級の教育目標を達成するための働き・営みのことと言える。それぞれの子どもが学級の一員として任された役割を一定期間の中できちんと果たさなくてはなりません。どこか一つでも欠けるよう

なことがあれば目標が達成できません。この機能は、子どもたちにとっては大変厳しいものであり、集団の持つ厳しさと言える。

しかし、子どもたちがすることですから、皆が皆きちんきちんと役割を果たせるかといえ、いろいろな理由でそうはいかない子どもも出てくる。そのような時に仲間を一人も切り捨てない働きが「集団維持機能」であり、集団としての優しさ・温かさと言える。

「仲間の支えがあったからやり遂げることができた」という想いは、立場が逆になった場面では支えられた側が支える側になることができる。「集団維持機能」が強い集団は、より質の高い「目標達成機能」を発揮することができる。そして質の高い達成感、充実感を共有した子ども同士の「集団維持機能」はさらに強くなっていく。

このような集団の中では、子どもたちは「私は気軽に発言できるようになったと思う」「不満なら不満で意見がどんどん言える」「自分の意見を考え直すことができる」「みんなの意見や考え方が分かり、不満を持つ人が少なくなったと思う」「みんなの意見が尊重されている」のように、本音をぶつけ合っても、人間関係が崩れず、さらに信頼できる仲間として日常生活の中での喜怒哀楽などを本音で語り伝え合えるようになってくる。

そして、構成員一人ひとりが互いの願いや希望を理解し認め合い、互いの自己実現を目指して努力し合い支え合うことができるようになる。仲間としてつながりを強くし「仲間を誰一人切り捨てない」という関係性の中で規範意識がより一層育まれ高められていく。

スタート当初には「群れ」であった学級を「集団」へと変容させ、より質の高い「集団」へ導いていくことが、子どもたちの規範意識を育むための学級担任としての大変重要な役割である。

4 おわりに

現在、子どもたちは他者と関わる機会が減少し、他者とのつながりが希薄化している。しかも情報化の荒波に晒されますます顔の見えない環境の中での生活を余儀なくされている。

初めに紹介した東日本大震災・津波の被災者たちの節度あるふるまいは、地域協同体の絆の強さの表れであり、サッカーW杯のサポーターの行為は、集団の一員であるという所属意識の強い仲間としての結束のたまものである。

だからこそ、せめて学校教育では子ども同士のつながりを深め、仲間とともに生きる素晴らしさを味わい、仲間を増やし広げていく中で「仲間の視点に立って相手の考えや感情を想像し共感する力」や「仲間との良好な人間関係をつくっていく力」を培っていくことが規範意識を支える力となり、主体的に判断し、適切に行動できる人間を育てることになると考える。